

# 植民地沖縄におけるネオリベリズムと反抗

—ヤンキー・サブカルチャーズ研究序説—

打越 正行

## 1 問題提起

本稿は、沖縄のヤンキーたち（後述）のサブカルチャーズを対象とした現代社会論である。現在、沖縄のヤンキーたちの共同性は、ネオリベリズム（以下、ネオリベと表記）の趨勢によって成立しがたくなっている。それによって、たとえば建築現場やエイサー青年会で地元の先輩による後輩への社会化をかねたシゴキガリンチに変容しつつある [打越、2008b]。このように次世代への社会化が困難な状況にあるなか、では現役世代は今をいかに生き抜いているのだろうか。あるサブカルチャーが維持／変容する過程では、次世代への文化の伝達とともに、既存の文化が厳しい現実を生き抜く術として有効に機能し、また当事者にとって十分に魅力的であることも重要な要素である。そこで、まずは植民地主義とネオリベといった概念でその厳しい現実を描いていく。そして、深夜の暴走行為がなされる公道やコンビニ前、そしておもにヤンキー少年たちが働く建築現場で展開されている現役のヤンキーたちの生き抜く術をヤンキー・サブカルチャーズとして分析する。植民地主義とネオリベの趨勢に対し、彼らのサブカルチャーズは圧倒的に無力である。この事実が本稿の基本的な前提であるが、他方でその具体的な過程は今まで十分に記述も分析もされていない（後述）。植民地主義とネオリベとの深層的理解や、それらと反抗との関係を把握するためにも、それらの侵食の過程を彼らのサブカルチャーズに注目しながら分析することは、重要な作業といえるだろう。

ところで、上述の前提は、沖縄への米軍基地の集中による慢性的な高失業率や観光依存型の経済構造に彼らのサブカルチャーズが太刀打ちできないことなどをみれば、自明の事実である。そのような事実直面すると「いまだに沖縄は日本の植民地である」という命題でしか、現在の沖縄の現状を論理的に説明することはできないことに気付く。そして、そのような背景に生きる沖縄のヤンキーたちの学校、ストリート、職場の環境は劣悪である。奪われ続けられた者や、一度も与えられていない者が、生き抜くためにさらに弱いものから奪って生き抜くことは、当然でさえある。このように、沖縄のヤンキーたちは、厳しい日常を生きているという事実をまず確認する必要がある。

ただ、ヤンキーたちはそのような厳しい日常を仲間との共同性において積極的に読み替えてもいる（読み替えて生き抜かざるをえない）。仲間との共同性は厳しい

日常を積極的に読み替える土台となる一方で、時にはより激しい排除を行うおそれもある [打越、2008b]。ここで生き抜く術と積極的な読み替えとは、それぞれ別個に存在していない。生き抜くことは厳しいが、同時に積極的で魅力的でもある。このように、搾取、排除と反抗は、複雑にせめぎあっている<sup>1)</sup>。そこで本稿では、その生き抜く術としてのサブカルチャーズをいかに彼らが身に付け、またそれらは彼らにとっていかに有効に働き、意味付けられているのかといったことをまず記述していく。そして、それらが植民地主義やネオリベといった趨勢にいかん侵食され、また反抗しているのか、といった過程を具体的に分析していく。

またこれらの作業は植民者にとって、重要な意義がある。日本に生まれ教育を受けた者は植民者（日本人）として育てられる。そこでは、私を含む日本人は沖縄を差別し搾取する制度による利益をえながら生きている。そのような現在の日本で自らが植民者であることに気付くことは、想像以上に難しい。植民者の皮を脱いだと思ったのもつかの間、いつのまにか再び植民者の皮をかぶっていることが何度もあった。そして植民者として育った私は、これからも沖縄を無意識に差別するおそれを完全に払拭できない位置にある。そのような私を出発点とした時に、沖縄への差別と向き合うとはいかなることなのであろうか。まず差別の当事者である私が、差別をされている沖縄人の運動や抵抗にむけアドバイスをを行う資格はない。それに加えて、差別をするおそれのある私に、差別をするおそれのある他の日本人を啓蒙する資格もない。しかし具体的に差別をした者には、異議申し立てを行い、ともに考えることは義務である。また、逆に私の差別に対し異議申し立てをしてもらった時に、誠実に自らの差別に向き合い行動を改めることも義務である。このように差別と向き合うとは、差別をしない私から被差別者や差別をするだろう他者を啓蒙することではなく、差別をするおそれのある私から、私自身へのもしくはそれに向き合う他者と関係性を構築し、具体的な差別に向き合い行動を改めることであるように思う<sup>2)</sup>。そのような働きかけが（被植民者ではない）植民者たちがができる脱植民地化の実践であり、そしてそれこそが、植民地主義の解体に繋がるものであると考える。そして、その過程できちんと沖縄の歴史や社会構造はもちろん、固有の文化的背景をふまえて、自らの差別に向き合う必要がある<sup>3)</sup>。なぜなら、日本人にとってのポストコロニアルとは、アフリカや南アメリカなどの前に、まず沖縄やアジア諸国であるはずだからだ。本稿は、その試みのひとつとしてある。

## 2 調査方法

筆者は、沖縄をフィールドに、おもに2つの調査を行った。まず1つ目は、2007年6月から12月の間の計13週間にわたり、ヤンキーと暴走族に対する参与観察と聞き取りを行った。そこでは彼・彼女たちの活動に部分的に参加し、合計166名の暴走族やヤンキー（少女だけの暴走族である「レディース」などの21名を含む）から話を聞き、その内4グループの10名に対して集中インタビューを行った。最初は、暴走中の暴走族を原付バイクで追走し、コンビニなどで休憩している最中に話を聞いた。ある程度の信頼関係ができると、暴走行為、その合間の談笑、アジト

でのバイクの改造の手伝い、検問の有無を確かめる下準備、写真撮影やDVD編集などの活動を行った。

2つ目の調査は、2008年2月から3月にかけての約1ヶ月間、暴走族やヤンキー少年たちが働く建築現場で一緒に働いた参与観察である。仕事先は1つ目の調査中に出会った暴走族チームのリーダー的存在の青年に紹介してもらった型枠解体業である。その会社ではその青年の班に属し、仕事量や能力は大きく劣るものの1ヶ月間一緒に働くことを通じて、仕事の厳しさや、やりがいの内在的な理解をめざした。これらの調査では、参与観察に徹するために録音機は使わず、活動や会話などを時々メモし、調査後にフィールドノートを再構成した。

### 3 先行研究

この分野における先行研究には、シカゴ学派やカルチュラル・スタディーズのサブカルチャーズ研究があげられる。これらの諸研究は、その土地固有の背景や文化状況をいきいきと描いたエスノグラフィーをもとにした社会批評として重要な知見を提供してきた。ただ他方で日本におけるサブカルチャーズ研究の展開は、残念ながらいまだ不十分な状況にある。そこでまずはその日本における先行研究を紹介しながら、本稿の課題を明確にしていこう。

難波功士は、多くの雑誌や文献資料を用いながら、太陽族から裏腹系までの日本のさまざまなサブカルチャーズを「より巨視的な時間的・空間的広がりの中に位置づけ、海外のユース・サブカルチャーズとも比較対照 [難波、2007: 15]」することをめざした。なかでも彼が、日本における「サブカル (サブカルチャーの略称)」概念を、上述の海外の先行研究におけるサブカルチャーズ概念へと接続しなおしたことは、非常に重要な作業であった。その作業の過程で、彼は日本のサブカルチャーズ研究への違和感をもとに、その概念の修正と接続を行った。その違和感とはおもに次の2点にまとめることができる。まず、サブカルチャーズとはなんらかのコンテンツだけではなく、生きられた経験であるであるという違和感。もうひとつは、日本のサブカルチャーズ研究者の階級的出自によるバイアスへの違和感である。

まず1つ目。難波は、Phil Cohenによるサブカルチャーズ研究における3つの水準 (歴史的分析、構造的・記号論的分析、現象学的分析)<sup>4)</sup>の重要性の指摘に賛同し、以下のように述べる。

英米の (ユース・) サブカルチャー (ズ) 研究の成果をふまえ、文化を 'a whole way of life' と概念規定する立場を採るならば、たとえそれがああるコンテンツをめぐるサブカルチャーであったとしても、そのコンテンツのそれこそ内容分析だけにとどまることは許されず、そのコンテンツを当該サブカルチャーの会員たちがいかに受容し、利用しているのか、またその方法がいかに会員間で共有されているのかといった、人々の諸実践が問題となってくる。[難波、2007: 13-4]

これは、日本のサブカルチャーズ研究へのまっとうな指摘といえるだろう。具体的に、佐藤郁哉の暴走族研究をもとに確認していこう。佐藤は、1983年に京都の暴走族を対象としたフィールドワークを実施し、エスノグラフィーを書き上げた。そこで彼は暴走行為の魅力インタビューなどのさまざまな調査方法（彼の調査方法の特徴である「恥知らずの折衷主義」）で記述し、分析を試みた。しかし、そこで唯一採用されなかった調査方法がある。それは、P. Cohenがいう3つ目の現象学的分析、つまりいかに彼らはサブカルチャーズを受け取り解釈し共有しているのかに対する分析は十分に行われなかった。ある暴走族少年Aは、佐藤の暴走の魅力についての質問に対し「暴走は暴走でしか味わえんもん [佐藤、1984: 23]」と答えているにもかかわらず、佐藤自身が実際に暴走し、その意味を少年らと共有することでその魅力を分析することは行われなかった。佐藤の世界と暴走族の世界とは、言葉も価値観も異なるといえるだろう。そのような彼らに、暴走固有の魅力を理解するためにアンケート調査や佐藤の用意した言語で説明してもらうことには限界がある。しかし、それでも彼らの世界に私や佐藤がより接近することができるならば、直接に体験する方法も検討する必要があるし、またそれをこの少年も求めているように思われる。「ゴチャゴチャいわずにやってみろよ」という語りは、暴走族少年らにとって、時代や地域をこえた普遍性を持つ言説のひとつであり、通過儀礼でもある<sup>5)</sup>。もし佐藤が暴走をしていたら、この言説は内在的に理解されたであろうし、またこの語りが彼の問いかけを遮断する語りではなく、誘っている語りであることに気付いただろう。そうなれば、暴走を卒業する過程における魅力とリスクの複雑な葛藤はよりダイナミックに分析され、少なくとも彼が行った暴走行為は「一時期の遊び [佐藤、1984: 272]」であるなどといった無味乾燥な結論は導かれなかっただろう<sup>6)</sup>。そのようなことから、佐藤の暴走族研究には、心理学や社会学の理論を彼らにあてはめている感じが拭いきれず [大村、1989: 208]、暴走の魅力についての分析では、後述するように見落とされてしまったものがある。

このように、日本のサブカルチャーズ研究ではP. Cohenや難波が指摘する現象学的分析が決定的に不十分であり、それは難波が指摘するもうひとつの違和感にもつながっている。

日本のユース・サブカルチャーズに關説する研究者・評論家の多くが、国際性という文化資本、特に海外（とりわけ欧米）のポピュラー・ミュージックなどを堪能できる「サブカルチュラル・キャピタル」を有する階級的出自にあったことのバイアスを、いま一度考えてみる必要があるのではないだろうか。[難波、2007: 82]

もちろん、大学という特殊な世界にいる難波や私もこのバイアスを完全に取り除くことはできない。しかし、できるだけそのバイアスを取り除く方法を追究する必要がある。いつまでも、海外でつくられた理論枠組みによって、沖縄、日本の若者サブカルチャーズの歴史的分析や構造的・記号論的分析のみを行っている、結局

このバイアスを乗り越えることはできないだろう。ただ他方で、このバイアスを乗り越えるためのヒントは、難波が行った海外諸研究の検討作業、もしくはそれによって不十分であることがわかった現象学的分析にあるのではなからうか。したがって、難波の指摘に沿って沖縄、日本発のサブカルチャーズ研究を新たにはじめるためには、暴走族／ヤンキーに「なる」ことを真剣に考える必要があるだろう。その点が、海外のサブカルチャーズ研究と日本のそれとが根本的に異なる点であり、日本でこの分野の先行研究が不十分であると述べた理由である<sup>7)</sup>。

これらを考慮すれば、上述した問題提起は以下のようになる。植民地主義とネオリベによる苛酷な日常と、同時に深夜の暴走の魅力や建築現場におけるやりがいとのせめぎあいを、ヤンキーに「なる」ことをめざしながら記述する。それによって、階級やエスニシティで彼らの日常を説明し、反抗の実践の可能性を看過するのでもなく、また仲間との日常における魅力を植民地沖縄におけるネオリベの圧倒的趨勢を忘却し賞賛することのどちらでもない議論を展開していきたい。

#### 4 沖縄のヤンキー<sup>8)</sup>

まず調査で明らかになった沖縄のヤンキーについて、簡単に紹介する。

##### 4.1 学校・ストリート

ヤンキーたちは、どうして学校で将来に役に立たないことを勉強する必要があるのかという疑問を抱いている。また、学校やストリートで、どうして自分（たち）だけがいつも怒られるのか、どうして自分（たち）だけが警察に捕まるのかという不公平感を抱いている。

〔普段は何してるの〕家でぶらぶらするか、働いてる。〔学校行かなくて大丈夫なの〕義務教育だから行かなくてもいいわけよ。〔どういこと〕高校だったら卒業日数とかあるさー。けど中学はそんなことしなくても卒業できるさー。〔なるほど。卒業したらどうするの〕働くよ。そのために今から働いてるわけよ。  
(翔<sup>9)</sup> 中学3年 2007年6月23日深夜、北谷町ホッパー前駐車場)

〔みんなで警察への不満を語っている場面で〕〔パトカーの〕ガラス割ってないのに、自分が疑われた。〔取調室で自分が〕やってないと2、3時間言い続けた。ナンバーはどのバイクも隠しているので、特定できないのに、警察はバイクの色、型などで、自分を疑ってきた。「そんな言うんだったら〔認めないのだったら〕、おまえが真犯人見つけれ」っていわれた。やってもないのに、やったことになってた。〔認めないのだったら〕3日間くらい、くびらそうね〔留置所にいさせるぞ〕ってなる。〔やってもないのに、こんなことになるのは〕ひきあわない〔つりあわない〕。(良太 16歳 2007年11月13日深夜、浦添市内ローソン前)

翔にとって、学校は勉強をしに行くところではない。彼には、学校に行くことよ

り、卒業後に働けるよう準備しておくの方が大事である。学校は、彼の生活や将来にとって、ほとんど役に立たない。また良太は、警察に不信感を抱いている。多くのヤンキーが、彼と同様の経験をしている。たとえば、公道での検問で他の車両は素通りできて、彼・彼女らは免許証の提示を求められる。車両違反をしていない場合でも、そのように扱われる。ヤンキーたちは、こうした経験を共有し、そこから、社会への反抗的な意識を形成している。

#### 4.2 就労環境

ヤンキーたちは、たいてい、中学を卒業して働くか、定時制高校に通学しながら働くか、高校を中退して働いている。また彼・彼女らが朝まで暴走したり、それを見物したりすることができるのは、次の日に仕事がない場合が多いからである<sup>10)</sup>。暴走族や（見物するかたちで暴走行為を支える）ヤンキーは、不安定な就労や無職にある場合が多い。また仕事をもつヤンキーも、苛酷な就労条件のもとにある。沖縄では、男性は建築現場における肉体労働、女性は深夜のサービス業が、おもな職種である。沖縄の外で働く場合は、男女ともにキセツ（季節労働）<sup>11)</sup>が多い。日本で何度も就労経験のある健太（24歳）によると、日本での賃金は、建築関係の仕事で沖縄の2倍、普通の仕事で1.5倍はあるという。この賃金格差が、若者たちの日本へのキセツを促している。とはいえ、日本の職場に、沖縄の若者を適正に受け入れるような条件はない。

キセツは、なにかの事情で中途離脱すれば、賃金から諸経費（家賃、光熱費、飛行機代など）が差し引かれる。その結果、1ヶ月働いて15万円になるはずの賃金が、5万円にしかならないこともある<sup>12)</sup>。キセツの労働条件は不安定である。多くの若者が仕事を途中で辞めていくが、その理由のひとつは、仕事場で直面する抑圧的な日本文化にある。異文化への強制的な適応は、沖縄の若者の、移動に伴う孤独、疎外に拍車をかける。彼・彼女らが、日本の就労環境に適應することは容易ではない。こうした文化的抑圧に直面した者は、自らの文化を捨てて同化を迫られるか、日本人に都合のいい沖縄文化を強制されるかのいずれかを選択しなければならない。日本への移動をよぎなくされる沖縄のヤンキーは、このような文化的抑圧からくる孤独や疎外を経験するという点で、日本のヤンキーとは異なる境遇を生きている<sup>13)</sup>。

#### 4.3 言語・知識・資源

このように沖縄のヤンキーは、学校や親から、生活のための知識や財を得ることが難しい。彼・彼女らは、学校で学習される言語ではなく、彼・彼女ら独自の「ヤンキー・うちなーぐち（沖縄方言）」である、生活に密着した言語により仲間とコミュニケーションをとる。そして、自分の体験や身近な友人の話を糧に、生きるための知識を得ていく。そこでは、抽象的な他者ではなく、仲間によるつながりが行動の基盤にあり、そこで、彼・彼女らの生活世界が作り上げられていく。その知識は体系だったものではなく、また、必要な知識が必要なときに得られるというような効率のよいものでもない。

生活の用具は、個人が所有するものではなく、仲間と共有される。たとえば、携帯電話がそれである。料金未払いなどで携帯電話を使えない仲間は、友人の携帯電話

話が活躍する。タバコや酒代なども、そのときもっている仲間が差し出す。警察の検問情報や仕事の情報も、仲間で回しあう。このように、彼・彼女らは、さまざまな生活資源を分かちあい、利用しあう。それは、もたざる者がとりあえず生き延びる知恵・工夫としてある。ここに、生活資源を分かちあい、交換しあうヤンキーたちのサブカルチャーズをみることができる。さらにそのことを、沖縄の暴走族に関する情報サイトでのやりとりを通して確認しよう<sup>14)</sup>。

昔はサイトとか無くても、追悼〔暴走〕とかイベントがあれば族どうしの口コミでギャラリーはあつまってたのにねえ。ってかサイトでしか情報が分かん人は変なの〜だろ。(匿名による投稿 2007年11月5日)

〔暴走に関する情報を執拗に求める投稿に対して〕いつから族は、〔暴走に〕出るのに告知しなきゃならんば? 言われなくても出たいときに出るあんに? ギャラリーはギャラリーらしく自分の足で探せばいいやし。〔サイトの情報を〕ゆくし(嘘)とか言う前に、サイトを当てにしてるほうが馬鹿だろ。あと、確かな情報が回ってこないサイトギャラリーは、「へんなの〜」じゃないかな?(しょうもなによる投稿 2007年11月5日)

このように、暴走族についての情報は、サイトを通してまとめて分配されるものより、地元での口コミにより分配されるものの方が、より正確だといわれる。つまり、彼・彼女らにとって、地元の評判は、より大きな地域やメディアの評判より重要なものであり、それにより地元につながるのらない若者は「へんなのー(部外者)」として扱われる。またヤンキーは、以前より、言語より身体を用いてコミュニケーションすることで他者を了解し、物事を理解する傾向にあった〔上之、1980: 24, 30; 打越、2008a: 33-6〕。彼・彼女らにとって、直接体験したものではない擬似現実としての言語は、生活に役立つ知識を教えるものではない。暴走するためのバイクの技術も、暴走して限界を知ったり、事故を繰り返したりするなかで学んでいく。このように、彼・彼女らは、以前から現在にいたるまで、仲間とのつながりを通して、資源を直接に交換し、そして分かちあって生き抜いてきた。

#### 4.4 地元つながり

またヤンキーたちは、活動をともしする仲間と「いつもの場所(地元)」を介した共同意識を抱いている。彼・彼女らの多くは、携帯電話を持っているが、実際は、料金未納によって使用停止となっていたり、仲間うちのトラブルで沖縄から逃亡したり、鑑別所や少年院に入ったりなどで、携帯電話で連絡を取りあうことができないことが多い。そのため、彼・彼女らは、いつもの場所(地元)に集まることでつながりを維持している。このような場所を介した仲間意識は、強固でなにかがあっても切れない、いわば腐れ縁のようなものとしてこれまでは描かれてきた〔瓜田、1975: 36-61〕。ただそれは結果的にそうなるのであって、その過程にはさまざまなトラブルの結果、裏切ったり裏切られたりすることがよくある。その都度に、

つながりの強弱や中断はあるが、その過程でさまざまな資源を交換し共有するなかで経験した、伝説の走りや事故などの歴史によって、仲間と仲間への想像力は変わることなく維持されている。その想像力が基盤にあるかぎり、知り合いの知り合いなどを契機に、再び地元に戻ることによってつながりなおし、最終的には〈腐れ縁〉となっている。

#### 4.5 暴走族とヤンキー

このように、ヤンキーとは学校、職場、ストリートにおいて、搾取もしくは排除された結果、地元のいつもの場所で、同世代の若者たちとさまざまな資源を直接に共有しながら生き抜く若者たちといえるだろう。また暴走族は、ヤンキーのなかで暴走行為を行う若者ということができる。ヤンキーには少女も含まれるが、暴走族にはめったに少女は存在しなかった。

またヤンキーや暴走族は、バイクに貼られた日章旗のステッカーから右翼思想や、特攻服に刺繍された暴走族詩にみられる男尊女卑の考え方が支配的であるように見えるが、そのような考えはヤンキーや暴走族に共有されたものではないし、その条件でもない<sup>15)</sup>。むしろそれらは、Dick Hebdigeも指摘するようにスタイルとしての意味合いが強い [D. Hebdige, 1979=1986: 142-80]。能力や資質を満たしたもののだけがヤンキーなのではなく、ヤンキー集団には、地元の中学生をヤンキーに「する」通過儀礼などの仕組みが準備されている。このようなことから、ヤンキー集団は、市民社会とは異なる形でひらかれている<sup>16)</sup>。

## 5 沖縄ヤンキー・サブカルチャーズ

### 5.1 ゴーパチとアジト

ゴーパチとは、暴走族やヤンキーが活動する国道58号線のことである。おもにゴーパチ沿いにある数ヶ所の交差点<sup>17)</sup>で、暴走族による暴走行為を多くのヤンキーたちが見物している。またアジトとは、暴走するためにバイクの準備をする各暴走族チームのバイク倉庫や各地元のコンビニ前の駐車場である。暴走族少年たちは、それぞれの地元ごとのアジトに集合し、そこでバイクを改造もしくは装飾の準備をした後に、ゴーパチに向けて出発する。ゴーパチが暴走の舞台なら、アジトはその舞台裏である。また暴走族の活動には、おもに暴走とギャラリー（見物）がある<sup>18)</sup>。暴走とは、各チーム2、3台のバイクをアジトで派手に改造、装飾し深夜に公道をバイクで走ることである。乗車するメンバーは特攻服を着て、顔はタオルなどで隠し、後ろに乗る後輩はチーム名などが書かれた大きな旗やスティックをふりながら暴走する。暴走する時には、信号無視や反対車線を逆走するといった交通違反が行われ、往々にしてパトカーに追走される。またギャラリーとは、暴走行為をコンビニ前の駐車場で見物したり、バイクと一緒に追走したりする若者である。多い時には100名以上のギャラリーが集まり、暴走族と警察とのやりとりを楽しんでいる。暴走は、おもに後輩の成員が参加し、ギャラリーは暴走族OBを含む先輩や暴走族予備軍の中学生たちが参加している。ただ、同一人物が暴走、もしくはギャラリーをすることもある。このような活動が行われているなか、私は暴走の際には追走す



るバイクの後部座席に乗車させてもらったり、もしくは自らのバイクで追走したりという形で参加し、ギャラリーを行う際にはギャラリーやカメラマンとして参加した。ここでは、その過程で私自身が感じたことを一緒に暴走した少年らに確認したり、また彼らにとっての暴走の魅力を聞いたりしながら、公道や仕事現場における葛藤、反抗、魅力などを分析していこう。そのために、以下では彼らの暴走のスタイルに注目し議論を進めていこう。

彼らはゴーパーチで暴走する際に、顔をタオルで隠しながらも地元名（中学校名）、チーム名、世代（第何代）を旗や特攻服でアピールする。このスタイルをどう解釈することができるだろうか。まず顔を隠すことは、もちろん警察に捕まらないようにするためであろう。もし地元名などとともに顔も隠さずに暴走すれば、すぐに捕まるので、顔を隠すことは容易に理解できる。ただ、わざわざ地元のアジトからゴーパーチまで来て地元名などをアピールしながら暴走することからも、自分自身やその地元をアピールしたいという意図もあるようだ。では、なぜチーム名などはアピールしながらも顔は隠すのであろうか。これに対する解釈としては、「咲いて散るより、散って咲け」といった個々の成員よりチームを優先する考えが表現された暴走族詩をもとにすれば、個々の成員のアピールより所属するチームや地元のそれを優先しているという解釈もできる。ただこの解釈は間違いではないが、暴走の魅力を十分に捉えることはできていない。

私は1つめの調査期間中はほとんど毎晩アジトに行き暴走やギャラリーに参加した。そこでみえてきたことは、もちろんバイクの車種によって運転手が誰であるかを理解することはもちろん、排気音（フカシ）やバイク操縦の癖によっても、運転手が誰であるかがわかることがあるということだ。つまり、毎晩ギャラリーに来たり暴走を追走したりしていると、顔をタオルで隠そうと運転手が誰であるかを特定できる時がある。そして、そのことをギャラリーに確認すると、彼・彼女らも顔を隠した暴走族の運転手がどこの誰であるかを正確に知っていた。つまり、毎晩常連のギャラリーには、暴走族の運転手がいくら顔を隠そうとも、チーム名などとともに運転手自身のアピールも行われていたのだ。警察との伝説となるやりとりや、そこでの事故の歴史とともに彼らはギャラリーに記憶されている。ゆえに個々の成員は、特定のギャラリーに対して、地元のアピールだけでなく自分自身のアピールも行いながら、かつ警察対策も同時に可能とするスタイルを確立してきたといえる。

他方で、暴走族を捕まえる警察はいかなる方法で、彼らを捕まえようとしてきたのか。広島市には、徹底的なカメラ撮影により暴走は根こそぎ取り締まられ、それに加えて集会なども条例で禁止され街から暴走族が排除された歴史がある [打越、2008a]。しかし、沖縄の暴走族と警察のやりとりをみる限り、時折ビデオ撮影は行われるものの、おもには車線封鎖の検問、ギャラリーの追い払い、パトカーによる暴走族の追走といった暴走族対策が行われている。車線封鎖の検問に対しては場所の変更や時間をずらすことで、ギャラリーの追い払いに対しては場所の移動や解散と集合を繰り返すといったたちごっこで、パトカーによる追走には逃走や徐行運転で、それぞれ反抗している。そして、その過程で暴走族やヤンキーたちは、パ

トカーの車種はもちろん、個々の警察官の管轄や名前までをも共有し、警察とのやりとりを楽しんでいる。以前、実際に捕まえられた警察官に対しては強い対抗心を持っているし、暴対（暴走族対策室）トップの比嘉は、暴走族にとっては共通敵である。そしてこの過程で、警察側もほぼ毎晩検問や追走をしているうちに、彼らが顔を隠してもどこの誰が暴走しているかを特定できるようになるようだ<sup>19)</sup>。もちろん彼らは警察に捕まりたくはないが、彼らにとってパトカーとの激しいやりとりの末に捕まると、写真撮影によって捕まるのでは、それがギャラリーたちに記憶されるか否かという点で大きな違いがある。その点で、伝説に残るような激闘の末に捕まるとは、試合には負けたが勝負には勝ったとでもいえるものである。

また毎晩のように暴走していると、さすがに顔を警察に把握されてしまう。そうなると、そろそろ警察も本腰を入れて捕まえてくるのではないかという危機感を、暴走する少年たちもそれを連日見物するギャラリーも持つようになる。そこでは、限界まで警察を挑発することでよりいっそうゴーパチは盛り上がるし、暴走族少年はイジャー（意地がある人）としてギャラリーに認められる。そして最終的には、暴走族少年が警察に捕まる／逃げ切るか、もしくは数ヶ月間キセツに行くことで、いままでの両者のやりとりの蓄積はリセットされていた。

このような過程では、つかまるか否かという基準だけではなく、いかに捕まるかといった基準が生まれている。前者が警察による価値基準であるとするれば、後者はそれを暴走族によって読み替えられた基準であり、それはゴーパチのギャラリーや地元での評価によって維持されている。このような葛藤、反抗の過程で、暴走のスタイルは構築されてきた。

## 5.2 建築現場

ここでは2つ目の参与観察にもとづき、ヤンキーたちの仕事場としての建築現場における厳しさとやりがいの葛藤を記述していく。建築現場におけるヤンキーたちの厳しさとは、植民地沖縄におけるネオリベの趨勢によって仕事そのものにたどりつくことが難しいことや、現場での苛酷な労働とそれに引き合わない少ない給与などがまずあげられる。ただそれらに加えて、もともと建築現場では先輩による後輩への暴力（シゴキ）がある程度避けられなかったが、その質が包摂的暴力（シゴキ）から排除的暴力（リンチ）へと変容していることも厳しさの一部である〔打越、2008b〕。このような社会化における暴力の質の変容に加えて、ここでは仕事そのものの厳しさとやりがいについて、より詳しくみていこう。

私はある地元の元暴走族青年に型枠解体屋を紹介してもらい、1ヶ月間参与観察を行った。仕事の内容は、マンションやホテルの建築作業の一部であり、コンクリートの型枠を外す仕事である。ただ実際に行くことは、鉄筋や角材をひたすら搬出する作業が中心であり、作業における体力的な厳しさはもちろん、けがなどへの不安や人間関係などもこの仕事の厳しさといえる。この仕事では、けがはある程度避けられず、捻挫や骨折は定期的におこるようだ。ゆえにそれらの小さなけがを繰り返しながら、けがをしそうな作業をいかに避けるかといった感覚を獲得すること重要である。また、この業界では「(大きな) けがをしたときが終わり（定年退

職)<sup>20)</sup>』といわれている。また人間関係についても求人誌などによって働き始めた新参者と、誰かの紹介による者とでは大きな差が生じている。この現場に紹介なしで入った場合、誰かが仕事を教えることはほとんどない。よって、自ら仕事を覚えることができなければ、辞めざるをえなくなる。他方で私のように紹介で入ると、使えない労働力をなんとかしごき上げようとする働きかけが行われた〔打越、2008b〕。

これらの厳しさに加えて、仕事のやりがいにつながる厳しさもある。この業界は前日もしくは当日の朝に仕事の有無が決まり、またこの現場の担当になるかは、当日でもよく変更になる。ただこのようなことは、今に始まったわけではなく、かつてよりこの業界の労働力は流動的に配置されてきた。また新参者の仕事内容は一日中Pコンや釘抜きなど<sup>21)</sup>の単純作業の繰り返しである。このように型枠解体業は、経営者や新参者の視点からは誰にでもできる仕事であるとみなされるかもしれない。したがって、仕事へのやりがいが生じにくいことに起因する仕事の厳しさもあるように思われる。

しかし、他方で実力によって仕事をこなし地位を獲得していく新参者や<sup>22)</sup>、紹介で入った新参者にとっては、やりがいが生じるメカニズムもあった。鉄筋を建物内部から外部へ運び出す作業に注目して、それをみていこう。ある日の搬出作業中、最初は大量の鉄筋をそれぞれの作業員がバラバラに運んでいた。体力のある新参者はこの作業で認められていく。他方で私のように紹介で入った仕事ができない作業員は、作業が遅く要領が悪いので、建物内部の狭い空間を占有し、他の作業員にとっては邪魔になる。しかし、このような場合に班長によってとられた措置は、鉄筋をパケツリレー方式で運ぶ方法への変更であった。一見すると、この変更は作業を効率化するために労働力としては使えない作業員を根こそぎ使おうとしているように思われる。しかし、同時に意図せざる結果として、使えない作業員をやや強引ではあるがしごき上げることにもなっている。結果的に、私の肩には筋肉がつき、1ヶ月前には直接に肩の骨にあたって持てなかった鉄筋を2本同時に持てるようになっていた。変更前の方法で鉄筋を運ぶと、場合によっては作業員のそれぞれのペースで仕事ができるので、作業が楽なときもある。しかし、これでは新参者はいつまでたっても一人前になることはなかっただろう。このような過程を経て、新参者は単純作業の誰でもできる仕事よりは、ある程度入れ替え困難な仕事を任されることでやりがいを感じるがあった。

ただこのような過程を経たとしても、現場監督の視点によれば、根本的にはこの仕事は誰にでもできる仕事であり、労働力は流動的に配置できるとみなされているだろう。しかし、現場では少し事情が異なる。たとえば、現場における「チームワーク」、そしてそれによって生じる現場監督への「かり」から、現場監督と作業員の関係をみていこう。

通常、現場には自然発生的にチームワークが生じる。ある程度のノルマが設定されていることや、班ごとに作業することで1人の作業員がサボることは難しいことが、チームワークが生じる原因である。ただそれと同時にチームワークをもって作

業をすることで作業が効率化し、けがを防いだり、ある種の快感をえたりすることもある。チームワークをもってみんなで作業することで、仕事は効率的にすすみ、孫々会社であるこの解体屋は、孫会社との信頼関係が構築される一方で、それによって生じた利益はほとんど搾取される。このように孫会社は、基本的にはチームワークを利用して搾取しているのではあるが、この過程で孫会社によって派遣された現場監督と作業員の間には「かり」が生じ、現場での主導権を現場監督や孫会社が完全に握ることはないということもまた事実である。長年にわたり受注と施工を繰り返せば、そこには搾取—被搾取を超えた関係ができあがる。そういった「かり」の相互交換でも現場は動いていることがある。このことを、作業についての作業員と現場監督の温度差から時々発生する衝突の場面からみていこう。

現場での作業内容の指示や監督は、多くの場合に大学卒で実際に現場で働いた経験のない現場監督によって行われている。他方で作業員の多くは暴走族卒か、中学卒である。通常、両者は単純な上下関係にあるが、時々これがゆらぐことがあった。ある日、足場を設置する他社の担当業者が、足場の位置を通常より高い位置に設置した。それによって、鉄筋などを運び出す足場は高く、かつその出口は狭くなっていた。それに対し、私が属した解体屋の班長は現場監督に足場を低くするよう要求したが、すでに足場を設置する業者は退散しており、作業がこれ以上すすめられなくなるトラブルが生じた。これは確認を怠った、もしくは現場経験のないゆえに生じた、現場監督の単純ミスである。この時、現場監督が足場の位置を確認するために現場に来た時に、同僚のある作業員がくわえタバコをしていたために、現場監督に「タバコ」と注意をされた。ただその作業員はタバコの火を消さずに、体の後ろに隠した。くわえタバコは毎朝の朝礼の確認事項で何度も禁止事項としていわれていることであり、当然現場監督の指示に従う必要がある。しかしこの日の現場には、明らかにその作業員を中心に「いいから早く足場を組みなおせよ」という表情や雰囲気があった。これは、現場での別の力関係をあらわしていた。通常、現場監督は指揮や監督を行うが、それは形だけで作業内容の計画にもとづく指揮や監督は現場の作業員が自治しているのが実状である。この他に安全対策についても用意された朝の準備体操や、安全帯（命綱）によらない、より実践的な方法がとられている<sup>23)</sup>。このように普段からの現場の主導権は、作業員側にあることを確認できる。現場監督による作業計画に関する段取りの見誤りや、今回のような単純ミスは、たいてい現場の作業員がチームワークでカバーすること、つまり現場監督の作業員への「かり」によって解決される。通常はこのことを作業員も現場監督も知っている。そして、このかりによって現場監督と作業員の関係は、談合的で代替困難な関係となっている。

## 6 分析

ここまではゴーパチにおける暴走のスタイルの意味と、建築現場におけるチームワークをみた。そして両者に共通していたのが、搾取と排除のメカニズムに対処する過程で生み出されたサブカルチャーズが、意図せざる結果として同時に魅力やや

りがいなどを生み出しているということであった。警察が暴走族を取り締まる過程で上述のスタイルが生まれ、最終的には警察に捕まるか否かより、ギャラリーへ記憶されるか否かという基準に修正された。建築現場でも、より巧妙に作業員を搾取するためのチームワークは、時には現場監督との関係を単純な搾取-被搾取の関係に還元させない基盤にもなりえた。ここからは、暴走でも解体屋でも、誰でもいい誰かを警察が捕まえようとしたり、経営者が搾取したりする働きかけに対し、サブカルチャーズによって具体的な誰かを捕まえ搾取される働きかけに修正されている点を確認できる。では、なぜこのような読み替えが生じるのであろうか。その過程を詳しくみていこう。

ヤンキーたちは、学校・ストリート・職場で排除、搾取され、不満や不公平感を共有していた。そしてそれに対して、いつもの場所での〈腐れ縁〉をもとにした地元つながりと、資源を仲間と共有する方法で対処している若者たちであった。したがって、暴走で重要なことは、いかに地元で名前をあげる（有名になる）かであり、警察によって流布される暴走族への否定的なイメージではない。かっこよさや、正しさの基準はあくまでも地元で生み出され維持されている。なぜなら、暴走はギャラリーに見られること、もしくはゴーパチでの暴走後に、アジトに帰って仲間と談笑しながら暴走をふりかえることに、その魅力が生み出される基盤があるからだ。この読み替えのためには、地元つながりは必須の条件である。

それに加えて、身体によって暴走族の魅力を理解していることも、この読み替えのために重要な条件である。たとえば、暴走族たちがパトカーに公道で頻繁に追走された結果、ある少年は捕まり、他の少年らは彼のおかげで逃走できる。バイクの性能や、操縦技術によって、捕まる少年もいる。しかし、いったん白バイに追いかけられると、まず勝算がないことは、暴走族ならだれも知っている暗黙知である。つまり、白バイから逃げるのができたとしても、それは偶然にすぎないことを、彼らはよく知っている。たまたま、白バイに目をつけられたバイクが捕まり、そうでないバイクが逃げられるだけである。しかし、逃げられた暴走族少年は、自分だからこそ逃げられたのだと勘違いする。これは、調査のなかで私も経験したことである。パトカーに追走されたが捕まらなかった時、たんなる偶然でしかない出来事を、私だから危機を逃れられたのだと勘違いした。この勘違いは、頭では偶然であることを知っていながらも、身体を通して学んだ感覚や技術がそのことを認めたがらない。彼らは、誰でもが捕まりえるなかの一人として、つまり代替可能な存在として逃げられたにもかかわらず、直接に自らの身体でそれを経験し、また逃走後に地元に戻り仲間と語り合うことを通じて、その経験を代替不可能なものへと読み替える。このようにヤンキーたちが、その偶然の経験を必然的なものに語り直すためには、地元でのつながりと、そこでの身体による魅力の理解は、欠かせない条件といえるだろう。佐藤のエスノグラフィーにも、バイクの排気音とアクセルのふかし方によって運転手が見分けられることは描かれているが〔佐藤、1984：104〕、それが一時期の遊びとして解釈されたのは、それがどこで、誰によって、どのように解釈されているのかについての分析がなされなかったからであろう。それらは、表

舞台における身体を介して感覚が習得されること、毎晩ゴーパーチに通うことでその魅力がみえること、また裏舞台において仲間との語り直しがあることで、比較できない記憶となっていた。

また建築現場でも、体力が不足しているために現場にとけこめない新参者は、地元の先輩の紹介によってシゴキあげられることでやりがいを生み出していた。また、搾取—被搾取の関係をチームワークや作業の過程で生まれる現場監督との「かり」によって読み替えることで、流動的な労働力を代替困難な労働力へと修正されていた。これも地元の先輩や知り合いに仕事を紹介してもらうことがその条件であったし、それらの情報は地元の仲間とさまざまな資源の交換を普段から行っていることで得ることができる。またヤンキー・サブカルチャーズとしての身体技法やうちな—ぐちも建築現場に入る際に使える有効な資源である。それらによって、現場でシゴキあげられるか、はじかれるかが決まっていた。シゴかれることになる新参者は、身体を矯正されることによって現場で一人前の労働力となっていた。

つまり、地元つながりとそこでの資源の共有の方法（ヤンキー・サブカルチャーズ）によって、彼らはゴーパーチや建築現場での厳しさを生き抜いていた。ネオリベは、さまざまは価値を経済的なものへ一元化し、それによる人間の代替可能性を押し進める。その結果、ネオリベは労働力としての人間だけではなく、人間そのものを代替可能にする。そして、その傾向は植民地沖縄でより早くかつ強く展開している。ただここまでみたように、ヤンキーの地元つながりとそこでの資源の共有によって、それらへの反抗が生じ、かつそれらはゴーパーチの暴走や建築現場での作業において、代替困難性に起因する魅力ややりがいを生み出してもいた。

このようにみていくと、ヤンキーたちが厳しい日常を生き抜くために地元は大きな可能性をもっている。ただ最初にもみたように、地元は排他的な場所でもある。そこには先輩によるシゴキがあるし、プライバシーや行動の自由も制限される<sup>24)</sup>。ただそこでの厳しさや反抗などのせめぎあいを詳しくみていくと、社会化をかねたシゴキや、地元のしがらみが基盤となって暴走の魅力や建築現場でのやりがいを生じさせてもいた。そしてこれらの地元（若者共同体）の長所と短所はかつてより共存していたものであった。そんななか、地元の可能性をそぐネオリベが勢いを増しつつある。それは、そこで生きるヤンキーたちへの搾取、排除を押し進めるが、実際にネオリベを支えるのは日本による沖縄への植民地主義である。ネオリベは、経済的価値に収斂されえる法的、歴史的、人道的「正当性」を根拠に、植民地主義を強力に押し進めている。よって、ここで以前からある共同体の暴力と植民地主義にもとづく暴力を峻別する必要がある。その上で、かつてからある地元の問題点よりも、地元の可能性を崩壊させつつあるネオリベを支える植民地主義にまず焦点を当てる必要があるだろう。なぜなら、それこそが自らが加害の当事者である植民地主義の実践であり、それを知り改めることこそが脱植民地化の働きかけであったからだ。

## 7 今後の課題

現在の日本社会における若者をめぐる就労環境は、経営者が流動的な労働力を確保したい一方で、若者も自らの無力を認めたくないために自己実現志向を抱かざるをえないことや、自己責任イデオロギーなどによって、維持されているといえるだろう。そして沖縄でも、深夜の暴走族や建築現場の世界へ投げ出されたヤンキーたちが、その状況を積極的に読み替えることによって、搾取や排除の仕組みが維持されていることをみた。つまり、沖縄のヤンキーが暴走で捕まることや解体屋のチームワークを肯定的に読み替えることで、搾取や排除の仕組みは維持されている。このように搾取する側と搾取される側の積極的な読み替えの接合によって搾取が維持される点では、日本社会の若者と共通する部分もある。しかし、現在の沖縄では地元においてさえ、排除された若者がいる。彼らは地元つながりやそこでの資源を共有することも難しいため、個として、沖縄の外のキセツへとながれ始めている。地元から干された若者は、帰属する場所を持たず流動的に移動できる点で、キセツの就労形態に非常に適合的である。このような若者はいかなる厳しさにあり、いかに生き抜こうとしているのか。今後、早急に取り組むべき課題である。

### [注]

- 1) すべての社会やそこでのすべての行為は、「複雑に」成立している。この命題は正しいが、一方でなにも明らかにしない命題でもある。社会科学は、その複雑な社会や行為を分析する道具を今までつくってきた。例えば、Max Weberのつくった理念系や類型化は、その最たるものである [M. Weber, 1904=1998]。しかしそれらのすばらしい道具を用いても、社会を完全に記述することは不可能である。そうだとすれば、社会科学の営みは、ある事実をどこから、なにを用い、(こぼれ落ちる事を前提に) どのようにきるかが唯一の問題となるはずだ。つまり、現実をきること自体への批判や、社会を単純にきることへの批判は批判にならない。そのきれ味やきり方のセンスが悪いことが、なされるべき批判であり、その批判の応酬のみが社会科学における唯一のやりとりのはずだ。本稿もこの命題に終わらすことなく、サブカルチャーズにおける複雑なせめぎ合いを私の問題意識に応じて明確に、そして時には簡潔(単純)にきることをめざし、それへの批判を期待したい。
- 2) このような態度は、関根康正による〈地続き〉の地平にもとづいた差別論に示唆を受けた [関根、1995: 3-4]。
- 3) 植民者が自らの差別を知るために、沖縄や沖縄人のことを知る必要があるが、その過程における社会調査はセカンドレイブとなりえることに注意する必要がある。沖縄人は植民者の教材ではない。
- 4) サブカルチャーズの分析には、三つの水準が区別可能である。まず、労働者階級などのある階級的分派を特定の問題としてとりあげる歴史的分析。次に、服装や音楽、隠語や儀礼などのサブシステムの構造的・記号論的分析。(中略) そして最後に、サブカルチャーを身につけ、支持する人々によって、実際にそれが「生み出される」方法に注目する現象学的分析。サブカルチャーの分析のためには、これらすべての水準を満たしてはじめて完成することができる。 [P. Cohen, 1980: 83]

- 5) 本稿の調査からもこの言説はたびたび聞くことができた。また、かつての暴走族についてのドキュメンタリー [上之、1980, 瓜田、1975] でも、よく確認できるものである。
- 6) 佐藤が日本の暴走族を海外に紹介した著作 [1991] のタイトルは、*Kamikaze Biker : Parody and Anomie in Affluent Japan* である。彼にとっての暴走族は、豊かな日本の若者による一時期の遊びである。
- 7) 日本の若者固有の文化的背景をふまえたうえで、現象学的分析を展開しているのは、新谷周平、岸政彦、そして田中研之輔による論考があげられる [新谷、2002, 岸、1996, 田中、2004]。
- 8) この節は、打越 [2008b] の3節を修正したものである。
- 9) 本稿に登場する人名は、すべて仮名である。
- 10) [沖縄は平日も暴走族がアツイ (活発) ですよねえ、あれは次の日休みだからするわけですか?] 走ってるヤツは、だいたい働いてないよ。(聡史 19歳 2007年10月19日深夜、国道58号線沿いの宜野湾市内マック内駐車場)
- 11) 季節労働とは、北海道や東北地方の農家が仕事のない冬季に都会へ出稼ぎに出ることを指すことが多かった。今日の沖縄のヤンキーは、慢性的な失業状態ゆえに、季節によらず年間を通して日本で働くことになっている。彼・彼女らは、その就労形態を「キセツ」と呼んでいる。
- 12) 隼人 (16歳 2007年9月3日深夜、国道58号線沿いの宜野湾市内マック内駐車場) の情報から。
- 13) 厳しさを比較することには意味がない。ここで言いたいのは、厳しさの背景が異なるということ、そのため厳しさの質も異なるということである。
- 14) これは、「中部狂走連盟」というウェブサイトの情報掲示板での書き込みである。なお、このサイトは、携帯電話会社ドコモの携帯電話からのみ閲覧することができる [作成者不明、2007]。
- 15) たとえば、特攻服の刺繍やステッカーには、「大和魂」だけでなく、「琉球魂」や「中国最高!」といったものもあった。また「女子禁制単独硬派」というステッカーがはられていたバイクは、その所有者に彼女ができた後にはがされるなど、それらの表現は柔軟になされている。
- 16) 本調査では、アメリカンの少女、中国と日本出身者との間のダブルの少年、また雑誌によれば、ブラジルから移住した若者による暴走族チームも神奈川に存在する [笠倉出版社、2005: 255-8]。このように暴走族やヤンキーは、日本におけるある若者たちにとって有効な拠り所 (サブカルチャーズ) として機能している。
- 17) 暴走が行われるすべてのゴーパチの交差点は、広い駐車場のあるコンビニの近くにあり、中央分離帯のある片側2車線以上の舞台である。これらはギャラリーが集まるのに好都合であるし、また警察とのやりとりをよりエキサイティングなものにしている。
- 18) この他にも暴走族、ヤンキーたちの活動にはツーリングという活動もある。ツーリングは、複数のチームや地元が合同で、バイクの運転自体を楽しみながら深夜、もしくは昼に公道を走ることである。こちらは、暴走の時と比べると交通違反は少なく、またギャラリーは存在しない代わりに、ツーリングに参加する約50名がお互いにバイクやそのテクニックを見せ合っている。
- 19) 2007年冬の時点で、警察官はたびたび「またおまえか」、「またあいつらか」とつぶやきながら、検問や暴走族の取締りをしていた。



- 20) 新垣さん 30代 2008年2月22日 沖縄市の建築現場にて
- 21) Pコンとは、型枠をコンクリ内部から支えるネジを外す作業であり、釘抜きとはベニヤ板や角材を再使用するために釘を抜く単純作業である。
- 22) 型枠解体屋を生き抜く力とは、体力があることはもちろん、その他にもその力を有効に用いる技を獲得する感覚、また現場で使われるうちなーぐちや、独特の上下関係やそこでの言葉遣いをやりこなすための建築現場に親和的なヤンキー文化を獲得していることなどである。そのようなさまざまな力を有している者が最終的に現場で長期間働くことが可能であった。
- 23) 朝の体操の代わりに、階段のぼりや徐々に作業をすすめることで体を慣らし、また仕事前のタバコの一服で気持ちの切りかえが行われていた。また安全帯の代わりに、作業員の熟練度に応じた作業への配置が行われていた。この他にも長年勤めている作業員には、年休代わりのトンヅラ（無断に帰宅すること）などが認められ、このような暗黙のルールでも現場は動いていた。
- 24) たとえば、せまい地元の共同体ではプライバシーを守ることは難しく、定期的に顔を見せないと悪いうわさはすぐ流されてしまう。また、後輩がいきなり高価なバイクを買うなどの自由も制限されている。もし仮にそのようなことをすれば、そのバイクはチームで所有されることとなる。

#### 【文献】

- 新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力」日本教育社会学会編『教育社会学研究』71: 151-70。
- Dick Hebdige, 1979, *Subculture: The Meaning of Style*, Methuen & Co Ltd, London (=1986, 山口淑子訳『サブカルチャー』未来社。)
- 笠倉出版社編, 2005, 『チャンプロード 9月号』。
- 岸政彦, 1996, 「建築労働者になる——正統的周辺参加とラベリング」ソシオロジ編集委員会編『ソシオロジ』41 (2) : 37-53。
- Max Weber, 1904, *Die 'Objektivitat' Sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis* (=1998, 富永祐治・立野保男訳・折原浩輔訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店。)
- 難波功士, 2007, 『族の系譜学』青弓社。
- 大村英昭, 1989, 『新版 非行の社会学』世界思想社。
- Phil Cohen, 1980, "Subcultural conflict and working-class community", Stuart Hall eds., *Culture, Media, Language: Working papers in Cultural Studies, 1972-79*, Hutchinson: 78-87。
- 作成者不明, 2007, 「中部狂走連盟」(<http://11.xmbs.jp/okinawa1/>, 2007.11.6)。
- 佐藤郁哉, 1984, 『暴走族のエスノグラフィー』新曜社。
- , 1985, 『ヤンキー・暴走族・社会人』新曜社。
- Sato Ikuya, 1991, *Kamikaze Biker: Parody and Anomie in Affluent Japan*, Chicago University of Chicago Press。
- 関根康正, 1995, 『ケガレの人類学——南インド・ハリジャンの生活世界』東京大学出版会。
- 田中研之輔, 2004, 『「若者広場」設置活動にみる都市下位文化の新たな動向——『土浦駅西口広場』

設置を求める若年層の諸実践から」関東社会学会編『年報社会学論集』17：120-31。

打越正行, 2008a, 「裁判で敗訴した〈暴走族〉／裁判を流用した〈暴走族〉——走れない〈暴走族〉の排除と抵抗」広島国際学院現代社会学部編『現代社会学』9：25-40。

———, 2008b, 『仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い——沖縄のヤンキーの共同性とネオリベラリズム』社会理論・動態研究所編『理論と動態』創刊号：21-38。

上之二郎, 1980, 『ドキュメント暴走族〈part1〉』二見書房。

瓜田吉寿, 1975, 『俺たちには土曜しかない』二見書房。

(うちこし まさゆき・社会理論・動態研究所)